

学校の桜の木

小川未明

青空文庫

ある、しょうがつこう 小学校の運動場うんどうじょうに、一本ぽんの大きな桜おお さくらの木きがありました。えだ 枝を四方しほうに拡ひろげて、夏なつになると、その木きの下したは、日蔭ひかげができて、涼すずしかったのです。

こども 子供たちは、たくさんその木きの下したに集あつまりました。中なかには、登のぼって、せみを捕とろうとするものがあれば、また、赤あかくなつたさくらんぼを取とろうとするものもありました。

さくら 桜の木は、ちようどお母かあさんのように、子供こどもたちのするまに委まかしていました。そして、子供こどもたちの、楽たのしそうに遊あそぶようすをみお見下ろしながら、いつも、にこにこ笑わらっているように見受みうけられました。

「太い木ふと きだなあ。」といつて、無邪気むじゃきな子供こどもたちは、小さな両手ちい りょうてを開ひらいて、太い幹ふと みきに抱だきついて、見上げるものもあれば、

「いい木きだなあ。」と、いまさらのように、感心かんしんして、ながめるものもありました。

年老としとった木きは、かわいらしい子供こどもたちに、こんなことをされるのが、さもこのうえもなくうれしうであります。

そのうちに、上うへのほうの子供こどもたちは、六年ねんの修業しゆぎようを終おえて、学校がっこうから出でてゆきました。そして、また、幼い子供おきな こどもたちが、新あたしく入はいつてきました。

その子供こどもたちは、みんながしたように、この桜さくらの木きの下したで遊あそびました。桜さくらの木きは、春はるにはらんまんとして、花はなが咲さいたのであり

ます。夏は、また日蔭^{ひかげ}ができて、そこだけは、どこよりも涼^{すず}しい風^{かぜ}が吹^ふいたのであります。

こうして、長い月日^{ながつきひ}のうちには、いろいろのことがあつたであります。たとえば、きかん坊主^{ぼんず}の秀吉^{ひできち}が、先生^{せんせい}にしかられて、この運動場^{うんどうじょう}に立たされたとき、彼は悲^{かな}しくなつて、泣^なき出^だしそうになりました。

そのとき、木^きは、

「男^{おとこ}が、泣^なくものでない。さあ、私^{わたし}のそばへおいで。」といつて、太^{ふと}い自分の体^{からだ}で秀吉^{ひできち}を支^{ささ}えてくれました。

また、弱虫^{よわむし}の正坊^{まさぼう}が、足^{あし}を傷^{いた}めて、体操^{たいそう}を休^{やす}んだときであります。

「さあ、この日蔭ひかげに入はいつて、おとなしくしていな。じきに、そればかりの傷きずはなおつてしまふだろう。はやく元氣げんきになつて、私の頭わたくしの上あたままで、登のぼる勇氣ゆうきが出でなければならん。ここへ上あがると、それは、すてきだから。あちらに町まちが見みえるし、また遠とおい村むらのお宮みやの屋根やねも見みえて、いい景色けしきだぜ。」と、桜さくらの木きは、やさしく、いつてくれたのでありました。

あるときは、生徒せいとたちが、二組ふたくみに分わかれて、競きよう技ぎをしたこととがあります。そんな場合ばあいには、甲こうは赤あかい帽子ぼうしを被かぶり、乙おつは白しろい帽子ぼうしを被かぶりましたが、一方ほうは、桜さくらの木きの右みぎに、一方ほうは桜さくらの木きの左ひだりにといいふうに、陣取じんどりました。そのとき、桜さくらの木きは悠々ゆうゆうとして、右みぎをながめ、左ひだりが見下みおろして、さも、みんなの元氣げんきのいい顔かお

を見るのがうれしそうに、

「さあ、どちらも、しっかりやるのだよ。」と、いつているごとく見えました。

しかし、まれには、いたずら子があつて、桜の木の皮をはいだりしました。木は、そんなことをされても、だまっていました。木を愛する他の善良な生徒たちは、けつして、だまつてはいませんでした。

「君、そんないたずらをするものでないよ。木が、かわいそうじゃないか。」と、いましめました。そう注意されると、たいいていの子供たちは、ああわるかつたと思いました。

もし、それでも、その生徒がいうことをきかないときは、先

生が、ひどくその生徒をしかったです。

「みんなのだいじな木を、おまえは、傷つけていいのか。」と、おつしやいました。こうして、木もまたみんなから愛されていたのです。

だが、ものには、盛んなどきと衰えるときとがあります。この桜の木も、年を老つたせい、それとも、子供たちに地を堅く踏まれたためか、今年の夏は、たいへんに弱つたのでありました。木が弱つたと知ると、学校じゅうは、たいへんなものでした。先生も、生徒も、小使いもみんな桜の木の身の上を心配しました。

「桜の木が弱っているから、この内へ入ってはいけません。」と、

木のまわりにさくを造つくつて縄張なわばりをして、札ふだを立てました。そして、毎日、先生まいにち せんせいや生徒せいとたちが、はだしで、バケツに水みずをくんで、運はこんだりしました。

学校がっこうを卒そつぎよう業ぎようしてしまつたものも、昔むかし、自分じぶんのお友だちであつた、桜さくらの木が弱よわつたというわさをきくと、心配しんぱいをして、わざわざまいにやつてきましたので、桜さくらの木は、もう一度ど、元げ氣んきとなつて、はやく、かわいらしい生徒せいとさんたちを見守みまもろうと思おもっているのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「学校《がつこう》の桜《さくら》の木《き
《き》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

学校の桜の木

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>